

イスラームから見た死 ①

おやさと研究所講師
澤井 真 Makoto Sawai

私たち人間には寿命があり、人間であるかぎり必ず死を迎える。また、家族や友人の死を悼み悲しむ。誰も必ず死ぬわけだが、惜別の情は時空を超えて人間の自然な感情であろう。だからこそ、私たちは毎日の生を充実したものにしたいと思うのである。

天理教の死生観に「出直し」という教えがある。この教えに基づくと、人間は親神から身体を借りて誕生する。親神が身体を“貸し”、人間が身体を“借りる”という関係を指して、「かしのもの・かりのもの」と呼ばれる。さらに、自らの身体を親神に返すことによって死を迎える。しかしながら、人間は親神から再び身体を借りて、この世界に戻ってくる。そのため、「死」とは呼ばずに、この世界への「出直し」と呼ぶのである。また、天理教では、人間がこの世に何度も生まれ変わるという意味で、「今生」や「来生」は存在するが、「来世」(あの世)という考え方はない。

イスラームにおける死後の世界

イスラームでは「現世」と「来世」という考え方で時間軸が設定されている。つまり、この地上の世界には終わりがあり、必ず終末が到来する。その後、神による「最後の審判」(yawm al-dīn, yawm al-qiyāmah)を経て、来世において永遠の生を過ごすと考えられる。したがって、終末において、すべての人間が一度甦る必要がある。そのため、「最後の審判」のために身体が必要であるがゆえに、イスラームでは土葬を行うのである⁽¹⁾。

神による「最後の審判」を経て、「楽園」(天国 jannah)へ行った者は、楽しい生活が待っているのに対して、「火獄」(地獄 jahannam)へ行った者は苦しい生活が待っている。楽園と火獄では永遠の生を送るが、どちらへ行くかについての審きは、現世での行いを基準にして行われる。言い換えれば、ムスリムとして敬虔に生きた者は楽園へ行くことができ、神の命令を守らずにムスリムとして信仰深く生きなかった者は火獄が待っている。

火獄の場所

この楽園や火獄はどこにあるのだろうか。クルアーンに基づいた世界の構成によれば、地上の上には幾つかの天—具体的には7天—があると考えられ、地上の下には7つの火獄の層があると考えられていた。以下はクルアーンの一節であるが、その光景としては、終末や火獄の存在を疑わしく思っている人々に対して、火獄の存在を確信したある1人の男が言い寄っているというものである。

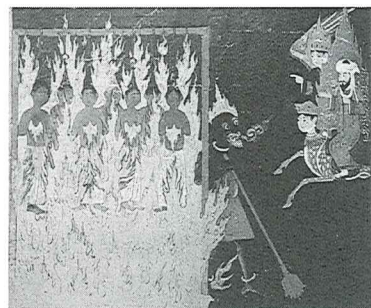
やがて彼らは、互いに近づき尋ね合う。「私に一人の親しい友がいました。彼は言っていた。『あなたまで(復活の日を)信じているのですか。わたしたちが死んで土と骨になってから、本当に審判されるのでしょうか。』」

また彼は言った。「まあ皆さん見下ろしてみなさい。」そこで彼が見下ろすと、火獄の只中に彼の姿が見えた。

彼は言った。「アッラーにかけて、あなたはもう少しで私を破滅させるところでした。もし主の御恵みがなかったならば、私は必ず引き立てられる者の中にいたでしょう。」

(37章 50～57節)

当初、その男は来世における永遠の生を信じない人々と同じように、人間は死ぬと土と骨になるだけだと思っていた。その結果、彼を待ち受けているのは、来世において地下に存在する火獄における苦しみであった。彼は、来世の存在を疑っている人々に、火獄の光景をあらかじめ見せる。さらに、彼が彼らの言うことを聞いていたら、火獄へ落ちる処であったと非難する。ここで描かれているのは、この一節を読んだ人々が、火獄へ落ちることのないようにイスラームを信仰するようという戒めである。



天上への旅行で火獄を訪れた預言者ムハンマド (15世紀)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Muhammad_and_%22shameless_women%22_in_Hell.jpg

楽園の場所

それに対して、楽園は地上よりも上の天にあると考えられてきた。終末の予兆の一つに、天が裂けるというものがある。これは来世に人々が訪れることになる楽園が到来したというイメージを描き出したものでもある。

(神は)一層一層に、7天(sab'a samawāt)を創られる御方。慈悲あまねく御方の創造には、少しの不調和もないことを見るであろう。それで改めて観察しなさい。あなたは何か裂け目を見るのか。(67章3節)

クルアーンには楽園の光景が描かれており、人々がイスラームを信仰すれば、来世においては褒賞を享受できることを説くのである。楽園の描写としては、クルアーンでは果実、美酒、そして乙女などが描かれている。

また、『ハディース』では、預言者ムハンマドの天上への旅においては、地上の上にある7天を通過し、それぞれの天の門にいる預言者たちと会った後に、神と見えたことが記されている。

クルアーンにおける生と死

このように、イスラームでは来世での人間の様子を描くことで、現世を生きるムスリムたちが信仰する目的を分かりやすく説明するのである。信仰に対する意識はムスリムによって異なるとはいえ、なぜムスリムたちはあれほど一生懸命に信仰するのかについても納得することができるだろう。

【註】

(1) 今日、日本の葬式では99%以上が火葬であったが、近代以前には、火葬は大量の薪を用いる必要があったり、また宗教的理由から普及しなかった。しかしながら、明治以降、火葬が急速に普及し、墓地も火葬用に対応したものに变化した。こうした背景から、土葬を希望するムスリムにとって、日本において土葬用の墓地を確保することは、非常に困難な現状にある。

【参考文献】

三田了一訳『日亜対訳クルアーン』、日本ムスリム協会、1982年。
なお、引用文を一部改めた箇所もある。